



縹緲令(こうけつ・りょう)は横浜美術大学の四年生で、初個展となる。制作意図が入口に貼り付けてあったので引用する。「想像や妄想、記憶などをテーマに制作しています。人は何か行動を起こすとき、頭で考え想像する。しかし「妄想」は、妄想できても現実にはあり得ないことであって「想像」とは全く違うものである。その「想像」と「妄想」の狭間の混沌とした異様な世界を追求しています。」

縹緲令は今回、画廊入口に2点、画廊内に12点、事務所に6点と、計20点の作品を展示した。タイトルは様々であるが、パネルにアクリル、コラージュの作品が10点、パネルにアクリルの作品が10点である。

想像と妄想に対する、哲学的思弁は止めよう。重要なのは、コンセプトを持って作品を制作することにある。縹緲令の言う「想像」とは未来を手繰り寄せ予定調和で安全な空間あり、「妄想」を実現不可能な恐れるべき予定不調和の不安の時間であると言い換えると、確かにこの二つの世界は背理に満ち溢れ、不条理な現実が付き纏う。それは縹緲令の若さや、来るべき大災害に対する脅えが生み出しているのではない。人は皆、死に向かって歩んでいる反面、死があるからこそ生

を謳歌することが許されるのだ。生と死、理想と現実、肉体と精神という対立する概念の狭間を追究する姿勢は、オーソドックスであるが今日ではむしろ奇妙な存在となる。縹緲令はこの「狭間」を模索するために、既存する素材を画面に貼り付け、更に着色を施す。コラージュはアカデミッ

クな画面に対してダメージを与えることを主眼として20世紀初頭に行われた経緯があるため、現状に対する風刺や批判を携える場面が多々あるが、縹緲令の画面にはそれが見当たらない。縹緲令にとって鮫は男性原理を象徴とするが、縹緲令自身が自覚していない発想が画面には溢れている。

《安堵》を見ると、中央の人間が反転され、右下にも登場する。これは見る者が画面の外にいてではなく内部にいることを示している。または、総ての作品に言えることであるがハレーション

を起こす着色を行うことによって、コラージュが画面に衝撃を与えるのではなく、内部からの視線を強調するのだ。これは狭間の強調というよりも、内部と外部の境界線の破壊と解釈することが可能だ。コラージュがない作品にもこの傾向は現れる。縹緲令にはこの方法論で、弛むことなく作品を制作し、発表することを私は強く望む。答えなどない。

